現代フランス語の単純未来形の「多変性」について

青　木　三　郎

はじめに*

現代フランス語の単純未来形（以下，単未と略す。）は，一般に，テンス（時制）的用法とモード（叙法）的用法に分けて記述される。テンス的用法（emplois temporels）とは，事態の実現時が発言時に対して未来時であることを表す用法である。その典型例は，Robert MARTIN の挙げる次のような例である。

● *L'année 1982 sera bissextile.*　(MARTIN, 1981)
（1982年は閏年です。）

この例における単未には，話者の主観性が介入する余地は全くない。専ら事態が未来時に投影されていると理解される。

それに対して，モード的用法とは，未実現の事態に対して，話者の主観性が何らかのかたちで介入する用法である。例えば，最新の詳細な記述文法書の一つである『フランス語体系文法』(*Grammaire méthodique du français* 1994) では，命令・禁止（injonction），約束（promesse），予言（prédiction），緩和（atténuation），憤慨（indignation），推測（conjecture）の用法が列挙されている。以下に同書より各用法の例を引用しておく。

● 命令・禁止
Tu ne tueras point.
（汝殺すことなかれ）

● 約束
Vous voulez parvenir, je vous aiderai.

（成功したいなら，援助いたしましょう。）

● 予言

Les poissons seront fiers de nager sur la terre et les oiseaux auront le sourire.

（魚たちは得意顔で地上を泳ぎ，鳥たちは微笑みを浮かべる。）

● 緩和

Nous avouerons que notre héros était fort peu héros en ce moment.

（我らが主人公は目下のところ主人公らしいところがないと認めざるをえないでしょう。）

● 憤慨

Quoi! Une autoroute traversera ces bocages!

（何だって！　高速道路がこの田園地帯を通るのか！）

● 推測

J'ai trouvé ce beau livre sur le bureau : ce sera le cadeau d'une admiratrice.

（机の上にこの立派な本があったよ。誰か女性ファンからのプレゼントだろう。）

単未は，このように，極めて客観的で確実な事態の実現（テンス的用法）から主観的で不確定的な事態の実現（モード的用法）に至るまで，多様な文脈とニュアンスで用いられることが理解される。しかし単に用法を列挙するだけでは，単未を記述したことにはならない。本稿では，この多様性をどのように記述すればよいかを論じたいと思う。

1. 具体的データの観察

1.1. 予定・予告

具体的に見てゆくことにしよう。まず，先のいわゆる「時間的用法」の典型例から検討する。

（1） L'année 1982 *sera* bissextile. (Martin, 1981)

（1982年は閏年です。）

このタイプの単未が現れる場面は，例えば「次の閏年は，何年だろう？ Quelle sera la prochaine année bissextile？」といった聞き手の問いに対して，話し手が，カレンダーを見ながら答える場面である。このタイプの用例が現れるのは，相手が知らない（あるいは，相手の知りたい）未来時の情報に関して，話者がカレンダーなどを調べながら，情報を提供する場合が多い。

このタイプの用例の特徴は，「～はいつだ」という情報の提供にある。つまり，ある事象が実現することが前提にあり，それが未来時のいつか，を問題にするのである。

駅の案内所や旅行代理店などで，到着時刻などを問い合わせるときなどにも，案内係は時刻表を見ながら，単未で答えるのが自然である。

（2）　Le prochain train vous *fera* arriver à Paris à 6 heures 13.
（次の列車は，6時13分にパリに到着します。）

（3）　Le vol 365 vous *fera* arriver à Tokyo à 13 heures 15 à Narita.
（365便は13時15分に成田に到着します。）

これらの例では，列車や飛行機が目的地に到着する予定時刻が前提として了解されている。問い合わせに応じる案内係は，時刻表を参照しながら，予定時刻を相手に知らせるのである。

普段の会話の中でも，例えば，誕生日のように毎年一度決まってやってくる日に関しては，次のような文が作られる。

（4）　Cette année ton anniversaire *tombera* un dimanche.
（今年の君の誕生日は，日曜日だ。）

（1）－（4）は，単未の代わりに現在形（以下，現と略す。）を用いることもできる。未実現の事象でも予定は現で表すのが普通である。

（5）　Demain *j'ai* une réunion à 10 heures.
（あしたは，10時に会議がある。）

会議の予定や，時間割，習慣的行為など，事象の実現が予定として前提となっているものは現で表す。その場合，ほとんど，単未と用法上の区別をつけるこ

とは困難である。ただし，微妙ではあるが，ニュアンスの違いはある。単未は，多くの場合，カレンダーや時刻表などを参照しながら予定を告げるが，現では，そのようなことがない。これは，何を意味するのだろうか。現では，話者のすでに知っている（あるいは信じている）予定を相手に伝える。それに対して，単未では，予定は前提として了解されているが，それが「いつか」に関しての情報は，話者が発話時点において，データを参照することによって決まるのである。

このことから，単未の「時間的用法」に関しては，次の点が重要なファクターとなるだろう。

（i）単未の「時間的用法」の特徴は，実現を前提として事象に関して，それがいつかを指定する。

（ii）指定の仕方は，話者が暦など（客観的な）データを参照して行われる。

（i）の指摘から言えることは，「時間的用法」は，事象（Pとおく。）と実現時点（tとおく。）との関係を問題にするということである。より正確に言うならば，Pに関して，それと結びつくことのできる時点tを指定するということである。

（ii）の指摘で重要なことは，単未で未来事象を表現する場合，話者が発話時点で，何らかのデータ（あるいは知識）を参照し，そこから情報を引き出す，という点である。

言い換えると，単未の用法の多様性は，〈文のどの関係を問題にするか〉に由来する多様性と〈参照するデータの種類あるいは性質がどのようなものであるか〉に由来する多様性の相互連関から生じるものである，ということになるだろう。

1.2. 予 言

将来に何かが起こることは前提として認めるところだが，何が起こるかは，誰も分からない。この用法は，予言者や占い師の用いる単未につながるものである。

（6） Trèfle. Dame renversée. Femme. – On *se fera* inconsciemment une ennemie acharnée d'une brune, qui *fera* beaucoup de tort et *portera* le trouble dans l'existence. (*L'avenir par les cartes*, p. 29)

（クラブ。逆さのクィーン。女性。無意識のうちに，黒褐色の髪のしつこい敵をつくることになるでしょう。その人はあなたに損害を及

ぼし，生活上，もめごとをもたらすでしょう。）

（7）　Horoscope－Marie Avenal
Lion
DU 23 JUIL. AU 23 AOUT
Cœur. Nés avant le 3, Vénus et Mars *prendront* vos amours pour cibles et quelques criailleries *s'ensuivront* parfois. Une intuition des plus pointues *aidera* le 2e décan à mener sa barque sentimentale.
(*Elle* n° 2711)
（星占い　マリー・アヴナル
獅子座　7月23日－8月23日生まれ
恋愛：8月3日以前生まれ。金星と火星があなたの恋人をターゲットにします。時に不平不満が生じますが，直感を鋭く働かせていけば，恋愛生活はうまく乗り切れます。）

予言の単未は，上で検討した「時間的用法」とは異なっている。この文脈の特徴は，「事象がいつ起きるか」ではなく，「将来に何が起きるか」に重点があることである。ただし，予言では，その種類によって，特定の将来時を問題にする場合と，不定の将来時を問題にする場合がある。例えば，（6）は，トランプ占いで，占いの時点よりも将来の不特定時点の事象を予言し，（7）は，女性雑誌の巻末のホロスコープで，「今週のあなたの運勢」という特定期間における事象を予言する。

予言は，「時間的用法」と異なり，「何が起きるのか」が前提となっていないので，カレンダーや時刻表，予定表などの暦に関するデータや知識に頼ることができない。予言は，「何が起きるのか」を引き出すべく，将来の運勢・運命を知りたい聞き手（読者）を相手に，運勢鑑定士が，占いの計算を行う。占星術やトランプ占い，その他，様々な計算方法とシステムがある。それらのデータ・計算を参照基準とするのである[1]。その計算は，発話時点でそのつど行われ，相手に伝えられる。占い師は自分の判断ではなく，予測計算から，ある事象を運命づけられた，あるいは約束された将来として相手に伝えると理解される。

ここから明瞭に理解されることは，話者は，自らの判断で事象を引き受ける

のではなく，あくまでも，判断に直接に関わらない「伝達者」である，ということである。

1.3. 天気予報

テレビ・ラジオあるいは新聞の天気予報などでも，単未が最も自然に用いられる。

（8） Aujourd'hui－Région parisienne. －Le plein beau temps *persistera* après la rapide dissipation de quelques bancs de brume matinaux dans les vallées. Il *fera* de 11 à 14° le matin. Le vent du sud *sera* faible. (*Figaro*, le 17/juin/96)

（今日のパリ地方。朝のうちセーヌ川流域は霧が立ちこめるが，すぐに晴れて快晴が続く。気温は午前中は11度から14度。弱い南風が吹くだろう。『フィガロ朝刊』（96年6月17日））

天気予報の特徴は，気象庁の観測データを基にして，今日の（あるいは明日の）天気がどのようになるかを知らせるところにある。ここでも，重要なポイントは，天候に関する観測データを基準にして，天気を予報することであり，この表現の基本的パターンは，上で見た予言と軌を一つにしているといえる[(2)]。

以上の観察から，予定・予言・予報を表す単未は，基本的に，発話時点において，ある参照基準（客観的なデータ，知識，経験）にアクセスし，そこから，「事象（P）が将来のいつ（t）に起こるのか」，「将来時（t）にどんな事象（P）が起こるのか」を話者が共話者に伝達する形式である，とまとめておくことができるだろう。

さらにここで注目しておきたいことは，単未は，この場合，事象（P）と時間（t）との関係を現在時においてはじめて成立させている，ということである。事象が前提として理解されている場合でさえも，時間との関係は，カレンダーを参照するなどして，現在時に成立する関係である。

そのことから，話者が聞き手にあらたな情報を提供するニュアンスが生じる。上で検討した場合は，相手の問い合わせ，質問，疑問に対しての答えや情報提供の文脈が基本であった。また，次の例のように，ラジオのニュースの冒頭で現れる単未も同様に考えてよいだろう。これは，CONFAIS（1995）の指摘するところである。

（9）　Les Jeux Olympiques *commenceront* le 20 juillet.
（オリンピックゲームは7月20日に開催します。）

1.4. 事象の未来投影

「事象（P）が将来のいつ（t）に起こるのか」,「将来時（t）にどんな事象（P）が起こるのか」に注目することによって，いくつかの文脈に現れる単未を検討したが，未来の世界にイメージされた事象（P）を問題にする場合がある。イメージの仕方は，確信のように「客観的」（社会的，科学的）なものからきわめて「主観的」（個人的）なものまで多様である。

1.4.1. 夢　想

例えば，次の例では，話者の将来の夢が語られる。

（10）　Suzy racontait à Blaise son rêve, qui était toujours le même :
– Un jour, je *me marierai* avec un prince. Il *sera* grand, il *sera* beau, il *sera* fort.
（スジーはブレーズに自分の夢を語るのでした。いつも同じ夢でした。
－いつか，あたしは誰か王子様と結婚するの。王子様は背が高くて，ハンサムで，力持ちなの。）

この文で，語り手（スジー）は，自分の将来の夢の世界にアクセスして，そこから「いつ何が起きるか」を聞き手（ブレーズ）に語って聞かせる。この夢は，スジーの心の中にすでに出来上がった世界であって，語り手であるスジーは，その夢の世界の事象を将来時に投射する。ここでは，夢の世界が心の中ですでに成立した参照世界であることがポイントである[(3)]。そして，その夢を構成している（換言すれば，夢の中に登録された，といってもよい）諸々の事象（「王子と結婚すること」「王子がどんな人であるか」など）を，将来時のこととして表現する。このような単未の用法は，過去の事象をイストワール（物語り＝歴史）として語る単純過去（単過と略す。）の用法と対応する関係にあるように理解される。いわゆる単未のアオリスト的用法である。

1.4.2. 確　信

話者の心の中で，すでに確固として信じられている未来事象は，単未で表される。話者の心的世界という意味では夢想と相通じるが，話者のアクセスする世界は，今度は，夢想の世界ではなく，確信の世界である。話者は，自分の確信に照らし合わせて，「～になることになっている」「～に決まっている」と捉える。

(11) Petit Ours Brun tourne autour de la galette et il répète : –Moi, je *serai* le roi...!
（茶色の小熊ちゃんは，ガレットのまわりをぐるりと回って，繰り返して言うのでした。「僕が王様だよ。」）

公現祭（カトリック教で，キリスト生誕に訪れた東方の三博士の帰還をお祭りする日）に，子どもたちは焼き菓子ガレットを食べるが，その中に隠してある空豆をあてた人がその場で王様になる。子どもたちの関心事は，当然，誰が空豆をあてて，王様になるか，である。小熊ちゃんは，ガレットの周りを走りながら，自分の確信に照らし合わせて，未来時の事象を表明する。自分のイメージしている王様の姿を，将来時に投影する。そこから「自分が王様になると決まっている」「自分が王様になるはずだ」といったニュアンスが伴う。

1.5. 偶発的事象

1.5.1. 法的未来

例えば，法律文の中で，未来における可能事象を問題にする時は，単未を用いる。法律文では，起こりうる事例に言及し，その場合には，どのような法的処理が適用されるかが記述される。

(12) Les déclarations de naissance *seront faites* dans les trois jours de l'accouchement, à l'officier de l'état civil du lieu. (*Code civil*, art. 55)
（出生届は，出産後3日以内に，出生地の戸籍課に届けなければならない。『民法55条』）

ここで問題になるのは，出産の事例であるが，出産はいつ生じてもおかしくな

い事態である。その「出産の場合」は，予定されているわけではなく，偶発的に将来時に位置づけられるものである。その偶発事象に関して，三日以内に届けを出すことが，その都度，誰が当事者であってもなされるので，必然的な行為として義務づけられることになる。

法律文では，参照基準が「法体系」という個人を越えたシステムにあり，それを遵守するのが必要で，遵守しなければ制裁の対象となる。そのような拘束力をもつものである。単未で表される偶発事例は，そのようなシステムに照らし合わせて，処理されるといえる。

1.5.2. 格言的未来

偶発的事象は，任意の将来時（ti）に事象（P）が定位されることである。偶発的事象は，格言の中で表されることがある。ある時点で何かが起きるという関係が，事象のどの生起時点においても成り立つ。

(13)　*Rira* bien qui *rira* le dernier.
　　（最後に笑う者が一番よく笑う。）

(14)　*Qui* boira croira.
　　（飲む人は，納得する。）

1.6. まとめ

ここまでの観察から理解されることは，単未で表された事象（P）は，現実の話者の世界から離れて，何らかの参照世界において定位される，ということである。定位の仕方によって，さまざまな場合が観察されるわけだが，以下にそれをまとめておく。

（i）　誰もが確実に認めている前提事象（P）の時間的定位：〈P〉－t
　　（暦を参照基準とする。）

（ii）　将来時に起きるものは何か事象的定位：〈t〉－P
　　（予言，予報など，知識・データを参照基準とする。）

（iii）　将来時の事象（Pti）の参照空間定位
　　（計画（プラン），夢想世界の定位，確信定位）

（iv）　偶発的事象の参照空間定位
　　（法的システム空間，格言）

このように見てみると，（i）～（iv）は決して等質的な用法ではなく，また，

何か基本的な用法から他の用法が派生したと考えることもできそうにないように思われる。単未の不変的な部分は，（a）事象が話者とは離れた参照空間において定位する，（b）事象の生起は基準時以降の時点に定位される，という二点である。用法の多様性は，事象と生起時点と参照世界との関わりの絡み合いから生じている。くどくなるが，もう一度，プロセスを見ておく。

（i）　事象の前提構築→カレンダーなどの参照世界→時間的指定

（ii）　将来時に起きる運命世界→運命鑑定システムなどの参照世界→未来象の指定

この二つの用法は，時間はいつか，待ち受けている事象は何かを指定する用法である。その基盤は，テーマ化（事象の前提構築，将来時の運命世界）が行われ，それに関して，指定する内容を導くために，制度化されたシステムを参照する。

それに対して，（iii）～（iv）は，未来事象を将来計画，あるいは話者の個人的な夢想，想像，信念の世界に位置づけたり，法的システムや一般真理的な格言の世界に位置づけたりする。表現の仕方は，テーマ化されたものに，述定を行うのではなく，参照世界に事象を定位する。いわば存在述定型の表現である。

ただし，このように，表現プロセスによって，単未の用法を分けてはみたものの，実際には，用法は，一義的に決定できる場合は少なく，複数のファクターが浸透しあっている場合が多い。

例えば，夢想（の語り）では，je me marierai avec un prince（あたし王子様と結婚するの）という例を挙げたが，この例が話者の願望，希望を表すと同時に，運命的，確信的な事象として捉えることも可能である。Moj, je serai le roi（僕は王様だぞ）も，確信であり，希望であり，また運命的でもある。どの場合に，どの文脈が浸透し合って，複眼的な解釈を可能にするのだろうか。このような観点からの文脈の曖昧性，複合性については，現在のところ不明である。しかし実際の用例が多価値的である以上，どのような記述方法が有効なのかを検討する必要があるだろう。目下のところ，問題の指摘にとどめざるをえない。

2. 概念の価値判断

2.1. 予想判断

単未には，もう一つ，別に考えておかなければならない用法のタイプがある。事象が「いつ起きるか」でもなく，「何が起きるか」のタイプでもなく，将来時（ti）において，ある事象が起きる（P）か，起きない（P'）かの選択を話者が発話時において問題にするタイプである。この場合のポイントは，前章の用法とは違って，話者の価値判断が問題となっているということである。まず，具体的に次の例を検討しよう。

(15)　L'oncle regarda le ciel, et décréta :
《Il ne *pleuvra* pas et ce temps est parfait pour la chasse!》
(Marcel PAGNOL, *Le château de ma mère*, p. 35)
（叔父は，空を見上げ，宣言した。「雨は降らないだろう。狩りには絶好の天気だ。」

(15) は，どんより曇った中を，狩猟に出かけた場面でのセリフである。叔父は，空を見ながら，今日は雨が降るか，降らないかを予想する。せっかく狩猟に出かけるのに，雨が降っては困る。雨が降るかどうかは最大の関心事である。この文脈でテーマ化されているのは，未来時(ここでは，今日の午後)に，雨が降るか，どうかの可能性である。話者の叔父は，空模様から見て，「雨が降ることはない」という判断を行う。

(16)　Ne vous inquiétez pas. Il *viendra*.
（心配なさらないで。彼はきっと来ますよ）

Ne vous inquiétez pas（心配しないでください）で，文脈上に活性化されるのは，彼が来る（P）か来ない（P'）の問いである。それについて，話者は，相手を落ち着かせるために，Pを選択する。イントネーションにより，この発話は，絶対的確信から，どちらかと言えば，根拠のとぼしい，希望的観測まで多様なニュアンスを伴うことになる。

この二例から理解されるように，この用法の特徴は未来時 ti において，事象が成り立つ（P）か，成り立たないか（P'）を話者が選択判断することに

ある。話者は，ti においてPの実現すること（あるいはしないこと）が，その未来の状況にふさわしいと判断する。実例を見ると，次の（17）～(19)のように信念（je crois，～と思う），推測（peut-être，sans doute，たぶん，おそらく），確信（je suis sûr（certain）que，きっと（確かに）～だ）などの表現をともなうことが多い。これらの表現に共通する特徴は，選択された判断価値（P，あるいはP'）に対して，話者が評価を付与していることである。

(17) Je suis sûr que tu *réussiras*.
（君はきっと成功するよ。）

(18) Je m'excuse, il faut que je m'occupe du déjeuner. Je crois qu'il *sera* très rustique, lui aussi.
(Le petit Nicolas et les copains, p. 10*)*
（わるいけど，食事の支度をしなくっちゃ。たぶん，食事も田舎料理になると思うよ。）

(19) Peut-être qu'il *viendra,* ton prince.
（たぶん，（いつか）やってくるでしょう，あなたの王子様。）

2.2. 決断・約束

上で見た事例は，話者が事象の将来時における実現に関する選択判断である。話者の選択判断が，主体の行う行動に関わるときは，決断，約束，命令などの意味を帯びることになる。次の例を検討しよう。

(20) J'ai décidé que je n'*irai* pas à l'école.
（僕は学校に行かないことに決めた。）

(21) Ma décision est prise : Je *terminerai* ma thèse cette année.
（決心はつきました。今年じゅうに博士論文を終わらせます。）

(22) Ne t'inquiète pas ; je ne le *dirai* à personne.
（心配するな。誰にも言わないから。）

(23) Maman Ours ne s'énerve pas : -Bon, tu restes comme ça, mais on ne sort pas. Petit Ours Brun dit : Mais si maman chérie, pour sortir, je le *mettrai*, mon pantalon.
（お母さん熊は静かに言いました。「わかったわ。あなたがいうことを聞かないなら，外につれていってあげませんよ。」小熊ちゃんは

言いました。「言うことを聞くよ，お母さん。外に行くのだったら，ちゃんとズボンをはくよ。」)

(20) は，未来時 ti における登校（P）か，登校拒否（P'）かの選択がテーマとなっている。主文に j'ai décidé（僕は決めた）があるので，決心という解釈が明確である。決心（決断）は，主体がとるべき行動に関して，ためらいを止めて，きっぱりと選択し，引き受けることである。単未は，話者のアクセスする選択の参照基準を問題にする。そこからの計算によって，主体の引き受けるべき行為に関してPかP'が選択される。決心は，必ずしも，主体の意志や願望が選択の基盤にあるわけではない。文脈により，意志や願望が浸透する場合もあるが，決心の文脈では，話者は，むしろ，自分の意志に関わらず，第三者的に行う妥当判断とも適合する。その場合は，je veux（願望）ではなく，je dois（義務）に限りなく接近する。(21) も同様に，何らかの動機・理由により選択された行為（「論文を書き終えること」）に対して，話者がそれを引き受けている。

(22) (23) は，約束の文脈である。約束とは，当事者が相手に対して，相手の欲する行動（P）の実現を請け合うことである。(22) では，相手の心配事（「誰かに秘密をばらしてしまうのではないか」）がテーマである。相手は，「秘密を言って欲しくない」（P'）と思っている。相手の気持ちが参照基準となり「誰にも言わない」(P')が選択される。話者は，その選択された行動(P')を引き受ける。(23) では，母親熊は，寒いので，子どもが外に行くときは，ちゃんとズボンをはいてかなければならないと考えている。そこからPが選択される。子ども熊は，選択された行為（「ちゃんとズボンをはいて外に出る」）を，母親熊に対して請け合う。

このように，決心，決断，約束の文脈では，選択された価値(PあるいはP')を，話者が引き受けて（engagement subjectif)，宣言することがポイントとなる。これは，前節で検討した推測判断の用法とはややメカニズムが異なっているように思われる。確かに，未来時 ti の行動が問題となるという意味では，同じ図式をもつ。しかし，話者の関わり方に関してみると，決心，決断，約束などの場合は，選択価値Pに対して，それを引き受ける，という関わり方をしているように見える。より詳しく言うならば，未来時 ti において事象Pが生起すれば（Pという行動が行われれば)，それは，話者にとって，あるいは，今（または未来時）の状況にとって，請け合う価値のあることなのである。

2.3. 命 令

決心，決断，約束の文脈は，行動Pと話者との関わりであったが，反対に，行動Pの選択が共話者と関わる場合には，命令のニュアンスを帯びることになる。次の例を検討しよう。

(24) Il commence à faire froid, Lucas. Ce matin pour aller à l'école...Tu *mettras* ton pantalon d'hiver... Et le pull que mamie t'a tricoté.

（ルカちゃん，寒くなってきたわよ。けさは，学校へいくのに，冬物のズボンをはいて，お母さんの編んであげたセーターを着ていかなければだめよ。）

(25) Dis, j'ai demandé à Clotaire, tu nous les *prêteras* tes lunettes, quand on *sera interrogé?* (PN, p. 12)

（ねえ，と僕はクロテールに頼んだ。君のめがね，今度のテストがある時，僕たちに貸してくれるよね。）

命令は，話者が相手にある行動の実現（P）を課することである。つまり，Pを今度は，決心，約束とは反対に，話者ではなくて，相手に引き受けさせることになる。単未は，未来時 ti における行動Pを選択する。ここでは，子どもの登校時において，〈ズボンをはいていくこと〉が成り立つ。それを話者は，共話者に引き受けるように促すわけである。したがって，命令という価値は，単未ではかなり間接的にしか行われない。(24) では，寒い朝なので，〈寒い時は，暖かい格好をしていくものだ〉という推論がはたらき，「冬物のズボンをはいて学校に行くこと」（P）が妥当な価値として選択される。選択されたPの実現を，母親熊は，子ども熊に引き受けさせることによって，この価値は安定する。Pの実現は，現在の場面とは隔離された可能性の場面である。(24) では ce matin, pour aller à l'école（けさ，学校に行くには）のように，現在時の場面ではなく，学校に行く場面であることが明示化されている。(25) では，「テストがある時に」という場面指定がある。そのような指定がないと，単未で命令を表すのは，やや不自然になる。

(26) ?? Tu me *téléphoneras*.

それに対して，場面の明示的な発話はより安定する。

(27)　Tu me *téléphoneras* à ton arrivée aux Etats-Unis.
（アメリカに着いたら，電話をしてくださいね。）

聖書に見られる例

(28)　*Tu ne tueras point.*

は，場面の明示がないため，「いつの時でも，汝殺すことなかれ」という強い命令になる。

2.4. 願望・意志・意図

前節で明らかなように，単未のいわゆるモーダルな用法の多様性は，未来時のPの選択と，その主体的引き受けのかたちによるものである。主体が中心となって，価値が定まるというよりも，むしろ，単未の場合は，選択されたPの価値を安定化させるために，様々な文脈が動員されると考えるべきではないかと思われる。主体もその文脈の一員である。

単未の主体間調整の用法には，もう一つ，「話者の意図」を表すとされる用法がある。しかし純粋に話者の意志や意図を表す単未の例を探すのは困難である。

(29)　Ici 41-88-66-22.　Je suis momentanément absent.　Veuillez laisser votre message.　Je vous *rappellerai* dès mon retour.
（こちらは41-88-66-22です。ただいま留守にしております。メッセージをお話ください。戻りましたら，折り返し，御連絡します。）

(30)　Le Bouillon, c'est notre surveillant, et un jour je vous *raconterai* pourquoi on l'appelle comme ça.
（ブイヨンは，僕たちの宿直の名前なんだ。どうしてそんなあだながついたか，いつかお話ししてあげましょう。）

(29) は留守番電話に録音されたものだが，Je vous rappellerai（私はあなたに後で電話する）という単未の発話は，今は留守で電話できない，という状況

から出発する。それに対比して，「帰宅次第すぐに電話すること（P）」を話者が引き受けることは，礼儀としても適当・妥当なことである。話者は，電話したいという自らの欲求や意図を表しているのではなく，（たとえ，気が進まないとしても）後で電話することが，儀礼のルールに照らし合わせて，適切であるという判断をするわけである。

(30) も，今はどうしてブイヨン（肉汁）とあだ名がついているのか事情があって話せないけれども，事情が許すようになれば，いつか話すことにする，というニュアンスである。いわば言い逃れをしているのであって，「後で話すこと（P）」の方が妥当である，ということである。

2.4. 断言の緩和

発言動詞 dire（言う），avouer（告白する），ajouter（付言する）など話者が共話者に発言するタイプで単未が使用されることがある。その場合，話者の主張が緩和されると言われている[4]。

(31) Je vous *avouerai* que je ne suis pas tout à fait d'accord avec cette idée.
（正直なところ，その考えには諸手をあげて賛成というわけではありません。）

Je vous avouerai（私はあなたに告白する）という単未は，告白が未来時になされることを表してるわけではない。告白するのは，唐突で相手にとって失礼でもあるのでためらわれるが，告白せざるをえない，というようなニュアンスで用いられる。「控えめ」とか「緩和」といった記述は，このような直接に相手に言うことの回避を表しているといえるだろう。ここで問題になるのは，事象がいつ起こるのかではない。また，未来時に事象が生起するのかどうかでもない。話者がどの相手に対して，どのようなポジションから発言するか，である。

話者のポジションから主張を行った場合，共話者は，別のポジションから反駁することが可能である。と同時に，話者の主張は，共話者のポジションを排除するものである。それに対して，単未は，いわば，話者のポジションのずらしを表す。単未には，すでに見たように，Pの選択がその状況において妥当・適格であることを話者が引き受ける用法がある。話者は，自らのポジションか

ら立言するのではなく，Pの選択が適当であるようなポジションから主張を行うのである。そこから，自分の主張ではない，というニュアンスと，Pと主張することが適当であるというニュアンスが同時に生じる。結果として，je dois avouer que に近くなる。

3. まとめと展望

以上，単未の用法について，「時間的用法」「モーダル的用法」および「発言緩和」の三種を検討してきた。単未は，事象Pとその成立時点 ti との関係が基盤にある。その意味では，単未には時間的要素が常に絡んでくる。しかし，Pと ti との関係は，文脈により，実に多様・多変である。本稿で見てきたのは，単未の形式に基本的意味があって，文脈によって意味が派生するというものではない。そうではなく，単未の基本をなすPと ti の関係の構築が，何を出発点にするかによって多変的である，ということである。単未は，〈P–ti〉という図式をもつ装置であり，その装置は，その装置にコンパチブルな文脈の中で稼働する，と言ってもいいだろう。

（1）　Pがすでに話者と無関係にすでに予定されている場合。
（2）　未来時に何かが起こることがわかっている場合。
（3）　Pが ti に成り立つために，話者が関わる場合。
（4）　Pが ti に成り立つことを仮定して，話者がそれについて態度をきめる場合。
（5）　話者と共話者の間のポジション調整に関わる場合。

これらの関係をさらに明瞭にするためには，競合する未来表現として近接未来形（aller＋inf.），および条件法，devoir などとの比較検討が必要である。

参考文献（本稿で直接に言及しなかった関連文献も含む。）

FLEISCHMAN, S. (1982): *The future in thought and language: diachronic evidence from Romance*. Cambridge.

FRANCKEL, J.-J. (1984): 《Futur 《simple》 et futur 《proche》》, in *Le Français dans le monde*, pp. 63–70.

HALMØY, O. (1992): 《La concurrence futur simple/futur périphrastique dans un roman contemporain–étude contextuelle》, *Travaux de Linguistique et de*

Philologie XXX. pp. 171–185.

HELLAND, H. P. (1995) : 《Futur simple et futur périphrastique : du sens aux emplois》, *Revue Romane*. 30–1, pp. 3–26.

JEANJEAN, C. (1988) : 《Le futur simple et le futur périphrastique en français parlé》, in C. BLANCHE-BENVENISTE, A. CHERVEL, M. GROSS (eds) : *Hommage de Jean Stefanini*. Publication de l'Université de Provence, pp. 235–257.

MARTIN, R (1981) 《Le futur linguistique : temps linéaire ou temps ramifié?》, *Langages*, 64, pp. 81–92.

SUNDELL, L G. (1991) : *Le temps futur en français moderne*, Uppsala.

SÔLL, L. (1983) : 《De la concurrence du futur simple et le futur proche en français moderne》, in F. J. Hausmann (éd) : *Etudes de grammaire française descriptive*. Studies in descriptive linguistics 9. Groos Verlag, Heidelberg, pp. 16–24.

RIEGEL, M., PELLAT, J-Ch. & RIOUL, R. (1994) : *Grammaire méthodique du français*, PUF.

＊ 本稿は日本フランス語学会第147回例会（1996年6月29日，於上智大学）における口頭発表を基にして，まとめなおしたものである。本研究は文部省科学研究費（基盤研究C課題番号09610532）による研究成果の一部である。

（1） むろん予言がいつも職業的な占い師によって行われるとは限らない。次の例を見られたい。

Laurence Adret regarde la première page de *Elle* : 《Jeunes mariés! Dans ce numéro, 10 conseils pour votre lune de miel, 10 idées de voyage.》 Laurence achète *Elle*, et voyant son frère sourire, elle lui dit :
《Tu peux rire, je sais très bien que dans une heure tu vas laisser tomber ton *Express* et me prendre *Elle*. Tu *liras* l'article de Duché et le Courrier du cœur en disant : Oh que c'est bête, mais tu les *liras*. Tu *regarderas* la mode ou plutôt les jolis mannequins qui présentent les robes. Tu *feras* tous les tests et tous les jeux. Tu *critiqueras* les enquêtes et, enfin, à 50 kilomètres de Marseille, tu me *rendras Elle* du bout des doigts en me disant : Je ne comprends pas comment les femmes peuvent acheter ça.»
(L. & G.CAPELLE et al. *La France en direct* 3, pp. 20–21)
（ロランス・アドレは女性雑誌『エル』の一頁を開いてみた。『若い結婚カップル！ 今月号の特集－ハネムーンの10の秘訣，10のアイデア』彼女は『エル』を買った。弟が苦笑いしているのを見て，彼女は言うのだった。
「笑いたければ笑えばいいわよ。どうせあんただって，一時間もすれば『エクスプレス』を放り出し，あたしから『エル』を取り上げるに決まってんだ

から。デュシェの記事とハートの広場を読んで，「なんて馬鹿馬鹿しい」と言うけれど，それでもあんたはその記事を読んじゃうのよ。ファッション記事，というより，きれいなモデルがドレスを着ているのに見とれちゃうでしょう。雑誌のクイズやゲームをやって，アンケートに文句を言って，それで，マルセイユの駅に着く50キロ手前で，やっとあたしにそっと『エル』を返してくれるのだわ。「何で女はこんなものを買うんだろう」なんて言いながらね。」)

この文に現れる Tu liras, tu regarderas, tu feras tous les tests, tu critiqueras, tu me rendras は，姉のロランスが弟のマルクに向かって，予見の事柄を言うための単未である。

（2）ただし，ここで注意しておきたいことが一点ある。それは，話者が未実現の事象をどのように捉えるかという問題である。つまり，予報，予定で見た単未の場合は，事象が生起することがすでに前提として了解された上で，それが何時であるかを知らせる。それに対して，予言，予報などでは，ある時点で，ある事象が生起することが前提となった上で，それがどんな，あるいはどの事象なのかを知らせる，という相違である。前者は，事象の時間的定位の問題であり，後者は，事象の内容的指定である。前者は，時の状況補語を必要とするが，後者は，必ずしも必要としない。

（3）夢の世界は，条件法で描かれることも多い。例えば，Mauger は次の例を挙げている。

Voici comme je vois ma maison : elle *aurait* un toit rouge et des volets verts. (G. MAUGER, *Grammaire du français d'aujourd'hui*, 521)

（私の思い描く家は，赤い屋根があって，緑の雨戸がついているの。）

条件法の場合は，話者は，自分の家をもつことは今はありえそうにないことである，という認識から出発して，想像世界（夢の世界）を築くのである。

（4）MARTIN によれば，「この緩和用法は，遂行動詞にしか現れない用法で，聞き手に，話者の発話の妨げとなるようなイリュージョンを与える」(ibid., p. 82) ということである。